

招聘講演

井の中の蛙、大海を知り、また井に力エル

日 時 6月29日(日) 10:10~11:10
 会 場 2階ホール
 座 長 白石裕子(自治医科大学 地域医療学センター総合診療部門・
 地域医療人材育成部門 助教)
 演 者 前川恭子(萩市国民健康保険むつみ診療所 所長)

平成の大合併前、阿武郡「むつみ村」は、ひらがなを名に持つ唯一の村であった。そこに在るむつみ診療所に赴任し24年目、異動していない自治体職員として私は長老の域に入ってきた(実年齢ではない)。萩市の一部である今、むつみ地区は市内で最も高齢化率の高い地域となっている。

萩市の他のへき地と同じく、家族を含めた地域の介護力は年々減少し、在宅医療への移行を待たず子の居る都市部のケア付き施設に転出する住民も増えた。そもそも地域内の介護事業所は少なく、地域外事業所からの訪問系サービスは、各事業所の職員の異動や経営方針の転換により、利用できるサービスの種類や質が年により変化する。頼りにする3つの医療圏の医療も同様である。

地域の医療資源・介護資源の先細りを感じる中、2016年に山口県医師会の役員を引き受けることとなった。8年の理事職の間に、「地域医療構想」「医療計画」「救急医療」「災害医療」「警察協力医」「薬事」「障害者福祉」を主とし、学校保健、乳幼児保健、男女共同参画、医師会立看護学校、医療保険などにも時期により関わった。

「へき地」を専門とする者が未知なる分野に放り込まれたのだが、むつみ診療所での多職種連携や組織マネジメント、ファシリテートの経験が思いのほか役に立った。県の医療の中核から自分の職場や地域を眺めてみると、むつみ地区では各機関同士の連携が存外取れており、自然発生的システムとしては資源が少なくとも決して他所に劣る訳ではないと感じた。また、県医師会に入ってくる国や県、日本医師会からの情報は新鮮かつ詳細で、特にCOVID-19流行初期は職場での対応に直に還元できるものであった。

山口県医師会役員職を辞し、今は萩市医師会の理事に就く。高齢者医療、健診、医事紛争などを担当し、県医師会での試行錯誤を萩市医師会の災害対応に生かすべく準備をすすめている。医師会と自治体の災害時連携については、自治体職員というラベルが垣根を低くするというメリットも感じている。

地域の医師、自治体職員、医師会会員、それぞれの立ち位置を利用し、その時々地域の資源、目の前に在るものを繋げ、何とか使いこなしてきたつもりである。報酬改定を含めた国の施策、県の施策に翻弄されながらも、それらをかき潜り、診療所を職員と私の、地域を住民と関係者の自己実現の場にできれば良い、と考えている。

【略歴】

1992年	自治医科大学卒業
1992年	山口県立中央病院 初期研修
1995年	錦中央病院
2000年	山口県立中央病院 後期研修
2001年～	国民健康保険 むつみ診療所(現 萩市国民健康保険 むつみ診療所) 所長
2016年～2024年	山口県医師会 理事・常任理事
2024年～	萩市医師会 副会長